

前進社出版部編

# 反軍闘争の 推進のために



- |                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 自衛隊の革命的解体—全人民の武装の闘いの飛躍のために…………… | 1  |
| 反軍闘争勝利・小西裁判闘争勝利へ奮起せよ……………       | 11 |
| 自衛隊の革命的解体、全人民武装にむけ、反軍闘争を推進せよ……  | 15 |
| 第4インター日本支部の「叛軍闘争論」批判……………       | 25 |

# 自衛隊の革命的解体 Ⅱ 全人民の武装の

## 闘いの飛躍のために

アジア侵略と内乱鎮圧への自衛隊の増強を粉碎せよ

### 1 自衛隊のアジア侵略と内乱鎮圧 体制構築を粉碎する闘い

#### (一) アジア侵略へとつき進む日帝

アメリカ帝国主義の直面する危機の深刻さはまさに無気味なほどである。ベトナム↓カンボジア↓全インドシナに対する侵略戦争のますます深まる敗勢 Ⅱ 絶望的拡大と、インフレ、景気後退、株式暴落、国際収支危機のハドメなき永続化などに示されるいわゆる国家独占資本主義的諸方策そのものの自家中毒的無力化としかいえない経済危機現象の進展——この二つは車の両輪となって、アメリカ帝国

主義を体制危機の時代へとひきずりこんでいるのだ。

ところが問題なのは、このアメリカ帝国主義の危機は決してアメリカ一国の危機ではないということである。帝国主義世界全体を、ひいては戦後世界体制全体を三〇年代危機へとラセン的に回帰せしめるものとしてそれはあるということだ。

日帝が最もドラスティックな形態でこのアメリカの危機の全世界的波及の過程にひきずりこまれることは、疑問の余地がない。戦後過程でアメリカ帝国主義の傘の下での「平和」という奇型的な過程であったのとちょうど逆比例するかのようになり、日帝はアメリカ体制の危機、アジア危機がもたらす体制危機感と肥大化した帝国主義経済が不可避的にもたらすアジアの勢力圏化への圧力とによって、ドロ沼のアジアへの絶望的侵略の道を進進する以外にないのである。

具体的には周知のように日米共同声明にもとずく、沖繩の「七二年返還」のベテンの逆用をテコとしての、予防反革命即アジア侵略戦争体制構築の攻撃として今日的にすすんでいるのである。

## (一) 日帝のアジア侵略の諸段階と自衛隊の動向

では、日帝のアジア侵略への道が歴史の万力の力で破局的結末にむかつて不可避的に進展するという基本認識のうえにたつて、われわれはそのエスカレーションの諸段階とそこでの自衛隊の動向についてみてみよう。一応①いままでの段階、②七〇年―七二年過程において実現せんとしている段階、③七〇年代において不可避となる段階という三つの段階を設定することができるであろう。

### ① 従来 の 段階

まず、いままでの段階についていえば、安保体制の下で、アメリカ帝国主義が本土に数多く基地をもつとともに、沖繩を分断支配下におくことによつて本土とは比較にならぬ規模の量と質をもつ基地を確保し、これらの基地を使用して、アジア侵略を遂行し、日帝はそれを政治的に支持するが「日本からの米軍の直接の出撃」はない「たてまえ」をとつてきたのである。自衛隊は、量的・質的に次第に強化されてきたが一応「陰」にかくれて、戦略的予備としてあった「も」も六〇年代中葉から侵略的帝国主義軍隊化への道は急テンポで志向されはじめた。

して、陸上は一八万人体制が一応確立してまずまずの状態にきているが、海上および航空自衛隊は領海・領空の外で敵を撃破する体制をつくるために圧倒的に増強しなければならぬと言明している。ところが領海・領空の外で敵を撃破する力とは実は、今日の兵器発展段階からして朝鮮をはじめアジア諸国を侵略することのできる装備力をもつということと同意語なのである。また陸上自衛隊一八万人体制というのにも注意しなければならぬ面をふくんでいる。というのは今日の軍事科学の発達の下では、いわゆる本土防衛の任務は四万―八万の水準で可能だといわれ、一〇万以上の部隊は対外侵略にむけることが可能であるというのである。事実、陸上自衛隊は朝鮮山岳地帯における対共産軍戦を想定した演習計画をすすめているのである。

以上の全体を表現するものとして象徴的に提起されているのが、沖繩が敵の手におちた場合の自衛隊の沖繩上陸作戦展開能力をつけるといふことである。これはあきあかに日帝軍隊たる自衛隊の「仁川上陸」―朝鮮侵略を想定させるものである。

### △米軍基地の自衛隊移管絶対反対

さて、自衛隊のこの段階におけるエスカレーションの内容として第三に注目しなければならぬことは在日米軍基地の自衛隊移管あるいは共同使用の攻撃である。この点で注意すべき点はこの移管はブルジョアジーやジャーナリズムが全くベテンの・ムード的に宣伝するように、本土の米軍基地はもうすぐなくなるといったものではないということである。すなわち米軍はドル危機その他海外基地の再編整理にせまられているが、それは一種の合理化再編であつて米軍のアジア太平洋における戦力は基本的に維持するものとして行

七〇年―七二年過程において実現せんとしている段階。沖繩の日本への「包摂」をテコにして日帝が沖繩の米軍のアジア侵略直撃基地を「包摂」するに至り米軍の日本からのアジア直接侵略を公然と承認するようになることがエスカレーションの基軸となる段階である。これを基軸に(イ)沖繩日本土全体の米軍基地の公然たるアジア侵略基地としての再編強化が行なわれるとともに、(ロ)自衛隊の面期的なエスカレーションが、米軍の再編整理による自衛隊の位置強化や沖繩防衛論を利用しての自主防衛論の展開の下にすすめられるのである。この段階における自衛隊のエスカレーションの面期性は、何よりも第一に、沖繩派兵の展開によつて与えられるものである。

沖繩の米軍のアジア直接侵略基地の基地防衛というかたちで、アジア侵略を遂行する米軍と直接タイアップして自衛隊が機能するわけであつて、自衛隊自身のアジア侵略への決定的な一歩前進がはじまるのである。

さらにこの段階における自衛隊のエスカレーションの第二の内容は、政治的・イデオロギー的攻勢の激化、とくに沖繩を逆用した自主防衛論、アジア日本の生命線論、アジア諸国の日本人の生命財産の防衛論などの帝国主義的排外主義と愛国主義の激烈なヒステリックな展開をおして、帝国主義軍隊としての国民的合意をとることが追求され、自衛隊自身のアジア侵略への道が決定的に準備され部分的端緒的に開始されかねないということである。

ここで現在三次防から四次防へとすすめられている自衛隊増強計画について言及するならば、帝国主義は沖繩をふくむ日本を侵略から防衛しきる力の形成などといつてそのねらいを表明している。そ

なわれているのである。現実に、だから三沢、岩国、厚木、横須賀等々の基地は増強されこそすれ、デスカレットしてはいないのであり、いわゆる移管のテンポも意外と遅いのである。

しかしかかりの規模での移管や共同使用はすすんでいるのでありこれがめだたないかたちでの自衛隊の大増強(とくに潜在的能力の決定的拡大)となり米軍の肩がわりを充分にすることによって米軍自体の効果的なアジア侵略戦力の編成を可能にしていることに注目しなければならぬ。砂川基地の自衛隊移管に反対し基地そのものの撤去を要求する第三次砂川闘争はこの問題にすべく対決するものであり、ひいては、今日の自衛隊のアメリカとタイアップしてのアジア侵略への道に対して真向から対決していく闘いとして決定的意義を有しているのである。

### △比重ます内乱鎮圧任務

この段階における自衛隊のエスカレーションの第四のきわめて重要な内容は間接侵略阻止―内乱鎮圧が自衛隊の戦略的課題としてはっきりと設定されようとしていることである。とくに防衛庁内部では、もっともありうべき侵略の型は外国からそのかされ、援助された勢力による国内的武装反乱としての間接侵略であるとする意見が主流であるといわれ、四次防の基底におくべき戦略論をそこにおこうとしていると伝えられていることは重要である。すでに七〇年安保にむけ大々的に強化された治安出動体制が、さらに圧倒的に強化されるのである。

さらにまた、東京をはじめ大都市が反乱者に支配されたときの奪還計画などが着々と具体化されつつあるのである。われわれはこの動きを、アジア侵略への道を歩む日帝とその軍隊にとつて、「アジア

「侵略を内乱に転化する」ことを自己の歴史的使命とするプロレタリアート。人民の闘いこそ最大の問題なのだということを示すものとして把握しなければならぬ。

それからまた、「アジア諸国における日本人の生命財産への共産ゲリラの残虐な攻撃」などというヒステリカルな排外主義宣伝と結合して、「赤色」帝国主義の手先などというレッテルばかりによってわれわれの闘いを残酷に粉砕し去ることを敵が追求してくることに ついて軽視してはならないであろう。

### ③ 七〇年代、早ければ前半段階

七〇年代において、早ければ七〇年代前半期においてすら不可避となるであろう段階。それはいうまでもなく、自衛隊自身のアジア侵略の開始という段階である。もちろんこの段階への突入は、日帝をとりまく客観的危機の深さと進展度、七〇年六月決戦の内容、七〇年一七二年過程や七〇年代における階級情勢の展開内容等主客の諸条件によってさまざまテンポ、さまざま形態をとるのである。

しかしながら、帝国主義が打倒されないかぎりこの方向に日帝がすすまざるをえないことはまた否定できないのである。

ということとは七〇年代という時代が容易ならぬ時代だということである。暗黒と反動が情勢を掌握していくか、それともわれわれがそれとの対決のなかで確実に城内平和体制の構築を許さず、内乱的死闘の時代へとつきすすんでいくか、まさに歴史の決定的な分岐点を形成するものである。この闘いにおける勝敗が、社共にかわる革命的プロレタリア党をわれわれが思想的・理論的にも組織実体の面においても形成しうるかいかにかかっていることはいうまでもな

## (一) 国家・革命・軍隊・全人民武装

いままでの叙述をとおしてわれわれは七〇年代における自衛隊の動向をめぐる闘いが、アジア侵略を内乱へ、沖繩奪還、安保粉砕。日帝打倒というわれわれの総路線のきわめて重要な基軸の一つをなすことを明らかにしてきたが、以下の展開においては、この時代の現実が不可避的につきつける階級闘争の革命的発展と武装的発展の問題との関連における自衛隊問題について少しく検討していきたいと考える。

### ① 七〇年代、内乱的死闘の時代

帝国主義の危機が深まり、スターリン主義がその危機を世界革命へと転化するために闘うのではなく、まさにその妨害物としての本性をあくどく露呈し、帝国主義の絶望的侵略戦争が破局的に拡大していつてしまふ時代——それが七〇年代である。文字通り三〇年代的危機へのラセン的回帰の時代——それが七〇年代である。

こうした時代においてはプロレタリア人民の闘いは絶えず、体制の根本的変革の問題、革命の問題を現実の内包しないわけにはいかないことは自明である。ということはこの時代における階級闘争がブルジョワ国家の粉砕、ブルジョワ国家権力の諸実体の粉砕の問題に直面しているということでもあるわけである。しかもそれは単にプロレタリア人民の例から提起されるばかりでなく、帝国主義ブルジョワ自身も、国家体制のポナパルティズム的な転換を遂行しつつ警察的、軍事的支配の体制をとりはじめ、ある意味では予防的

## (三) 七〇年代階級対決の一大焦点

われわれは七〇年代を「日帝のアジア侵略を内乱へ」の合言葉の下に闘い抜こうとしているが、この闘いにおいて日帝の軍隊たる自衛隊のアジア侵略の内乱鎮圧出動をめぐる闘いがきわめて重要な位置を占めることをはつきりと確認しなければならぬ。すなわち日帝のアジア侵略は安保同盟をとおしてアメリカ帝国主義のアジア侵略とより一層具体的により一層公然とタイアップしていくことを一方の軸としつつ、他方の軸としての自衛隊のアジア侵略と内乱鎮圧にむけて圧倒的増強が推進されるというかたちで展開するということである。

帝国主義軍隊の増強は一定のハドメがはずれるとまさに雪だるま式に進行するものである。日帝の場合、アジアの勢力圏形成への衝動と高度成長の行きつまり、「アメリカ経済の動き如何ではかなりドラスティックな展開をみせることもありうる」とのなかで、いわゆる軍需産業を軸とする産軍共同体の急速な肥大化が進行する可能性があり、イデオロギー反動の展開と結合して軍国化の道がドラスティックにきりひられる危険性を有しているのである。

### 2 「アジア侵略を内乱へ」の時代への突入と自衛隊の解体、全人民の武装のための闘い

一方的に内乱鎮圧体制を強行し逆に「内乱」に訴えているのだということもできるのである。

### ② ブルジョワ国家の粉砕と軍隊の革命的解体

さて、いうまでもなくプロレタリアートは、資本の積極的止揚をとおしてこそ自己解放へとすすむのであるが、そのためには社会の全気孔をふさぎ、身動きできなくしている「寄生体」たるブルジョワ国家（およびその諸機構）を暴力革命の鉄槌をもってゴナゴナに粉砕し、武装せる人民に基礎をもつプロレタリア独裁権力を樹立し、みずからを支配階級に転化して、資本家財産の専制的侵害を遂行すること、生産手段と生活手段を奪取することからはじめなければならぬ。すなわち、プロレタリアートはブルジョワ国家とその諸実体の粉砕への道を、帝国主義との権力闘争における自己と自己の行動の（武装）自衛の闘いをテコとしつつ、きりひらいていかねばならぬのである。

ところが、この闘いの途上においてプロレタリアートは必ず、（何らかの形態で）国家の実体的支柱たるブルジョワ軍隊と衝突に接触するに至るのであるが、そこにおいてひるまず対峙しぬくことによって逆に軍隊の内的解体を促がし全人民の武装の確立のための積極的契機へと転化していかなければならぬのである。ブルジョワ国家の粉砕とは基本的にこの論理構造なしにありえないのである。この「積極的転化」は革命的な「単にこわしてしまふ」ということだけでないこと、は単に敵階級の武装解除であるばかりでなく、歴史的に武装解除されている人民大衆が武装せる住民へと転化するためになくてはならない契機なのである。

七〇年代の内乱的死闘の時代においては、いさ少しく一般論的に述べた諸課題が真向から具体的な問題としてつきつけられることは確実である。すでに一〇・八から一月決戦、六月決戦に至る過程でプロレタリア人民の端緒的武装、初步的に武装した大デモに対する自衛隊の治安出動態勢の構築、小西三曹の革命的決起、プロレタリア兵士への移行等々の形態で当該問題の全要素が萌芽的にせよ出そろってきているのである。その意味で小西兵士の登場は一月決戦のきりひらいた地平を集中的に表現しており、この契機を欠いたなら一月決戦をもって七〇年代の内乱的死闘の時代の構図がうちたてられたとする総括は不可能となるのである。逆に小西兵士の登場とその意義のわれわれの総路線の内部への明確なくみいれなしにわれわれが七〇年代に突入していったなら、重大な敗北を余儀なくされるであろう。

特にわれわれは日本の階級闘争の歴史における平和主義的伝統と定着という世界的にみてもきわめて例外的ともいえるマイナス要因を背おっているのである。大閥の刀狩り以来の民衆の武装解除はともかく、近く第二次大戦後をとってみても、スターリン主義者の裏切りの下で不可避となった、人民の平和主義的制約内へのイデオロギー的釘づけ、支配階級による大衆の武装のための諸契機の徹底的とりあげによって、きわめてゆゆしき状況が結果してきているのである。

一〇・八以来のわれわれの闘いはきわめて素朴だが、大胆に階級

闘争における人民の武装についての一定の前進をきりひらいたが、そのうえに決起した小西三曹の闘いはさらにいまひとつ新しい質的發展をもたらしたのである。すなわち、ブルジョワジーだけが独占的に握っている武力（水準）をプロレタリアートが内的に革命的に奪取するという次元がきりひらかれたということである。

さらにまた、今日本格的武装と訓練が許されているのは基本的に自衛隊のみであり、自衛隊員および自衛隊経験者がその経験と力をもって人衆大衆の立場にたつて支配者と闘う人民の武装をたすけはじめるとは大きな意義をもっているのである。

「もちろん、一般大衆の手当り次第の武装と一般大衆の武装のリーダーであり、同時により質の高い武装闘争をなしうる恒常的武装勢力および軍隊の兵士大衆の革命への移行の三者は区別と連関で把握すべきであってどちらがより価値が高いなどというものではない。」

## (二) アジア侵略と内乱鎮圧出動 へ進む自衛隊の革命的解体

(一) のような「全人民の武装」のための闘いについての前提的考察のうえにたつて、とくにその一契機たる自衛隊の革命的解体という問題についてさらに具体的に検討をすすめていかねばならない。

### ① 階級闘争の渦中の自衛隊

まず第一にIにおいて若干指摘したようなかたちで、自衛隊が日本帝国主義の帝国主義的軍隊として「アジア侵略と内乱鎮圧」という七〇年代の階級闘争のすぐれた中心の舞台に登場してくるというこ

とそのものが、何よりも自衛隊の内的危機を生起成長させ、その革命的解体への手がかりをあたえるものであることをおさえなければならぬ。たしかにこの政治表面、階級闘争の渦中への自衛隊の登場は一方では、政府ブルジョワジーによる政治的イデオロギー的攻勢、帝国主義的排外主義と愛国主義のあおりたてのなかで行なわれることは事実であり、自衛隊内の一定の反動的強化をもたらすことはありうるであろう。しかしながら、アジア侵略と内乱鎮圧

へつきすむことは基本的には自衛隊の動揺と内的解体の危機を大いに成熟させるものとしてあるのである。なぜなら、軍隊は国家の**実体的支柱としての本質から武装せる人民との対峙にさらされる**と**解体現象におちいりはじめ**るものだからである。

### ② 闘う人民と帝国主義軍隊

アジア侵略へつきすむことは、自衛隊をいかなる運命の下におくであろうか？ アジア侵略の侵略的・反動的・反人民の本質についてはくわしくのべるまでもないであろう。

この超反動的な侵略戦争への道において、日帝の軍隊たる自衛隊は一方では愛国主義や排外主義で「武装」されるであろうが、だが他方においては、まさにアジア人民の解放のための戦争（革命戦争）、民衆の反乱に直面するのであり、しかも、第二次大戦における日本帝国軍隊のアジア侵略のながい経験や、なによりも世界最強のアメリカー軍のベトナムでの敗勢下の死のドロ沼の経験は重くのしかからざるをえないのである。したがって自衛隊にとってはアジア侵略への道をつきすむことは、戦争目的の反人民性、不正義性と戦争に勝利する展望がはじめから欠如しているということなどのた

め、きわめて深刻な危機をかもすことになるのである。今日の自衛隊の隊員の意識からすれば、アジア侵略へ出兵する気配が生じただけで大動揺を来たすだろうといってもいい位だ。

だから、われわれは、この契機を徹底的にとらえ、自衛隊内外における**宣伝煽動組織の活動を革命的解体としてくりひろげなければならぬ**。

### ③ 武装人民と対峙する軍隊

しかしながら、侵略帝国主義国の人民たるわれわれは、自国軍隊のアジア侵略に対して「アジアの現地」での「状況」に即した接近をこころみるだけでなく、「アジア侵略を内乱へと転化する」闘いを侵略本国そのものの内部で爆発させ、強くかつ深刻なかたちで自国軍隊と自衛隊と武装せる人民との対峙を形成していかなければならぬ。「もちろん直接に自衛隊のアジア進出が行なわれていないときでも、進出への方向性ははっきりしたあらわれをテコにして国内で「内乱」を追求するのは当然であり、その場合でも論理は基本的に同じである。」

今日アメリカ本国で起りつつあるように、日帝のアジア侵略への道に対して日本本国において「内乱」をもってこたえること、そうしてそれはすでに日帝が治安出動や四次防として身がまえていように究極的發展においては、確実に自衛隊と自国民との対峙接觸を不可避にもたらすものであるが、こうした事態をつくりだすことこそアジアの人民によって自衛隊に与えられるであろう打撃と内的解体の危機を真に継承・拡大し決定的な動揺と破産へとおいこんでいくものとなるのである。

#### ④ 国家の本質の自己暴露と軍隊の解体的危機

さて、このように対外的なアジア侵略においては武装反乱せる人民大衆に包囲され、対内的にはまさにそのアジア侵略に反対する武装せる自衛人民と対峙するという構図に「直接、間接に」はまりこんだとき、国家の実体的支柱たる本質をもつ軍隊は次のような問題に逢着するのである。

すなわち、一方では兵士大衆は国のため、日本のため、アジアのためとしてアジア侵略に動員されながら、命をかけて戦わされる相手はアジアの貧しい農民プロレタリアート人民大衆であるという事実、しかも自己の解放のために決起した「革命人民」の英雄主義的反撃の前に敗勢のドロ沼におしこめられ、じりじりと逆に殺されていくという事実をつきつけられるのであり、他方では、自国において、国のため、民族のためといながら、まさにそのためにこそ命をすてても戦えといわれていながら、その人民大衆を殺すことを命令されている自己をみいだすのである。

このようなぬきざしならぬ事態に直面させられたとき、兵士大衆にとって国のためとか、国民総体のためとか、公共の福祉のためとかということが、実は幻想的共同性の独立化した形態たる国家というものにおいて貫徹される帝国主義ブルジョワジーの特殊利害のためめの名目以外のなにもでもなく、そうして真に対立しているのは帝国主義ブルジョワジーとプロレタリアート人民であるというマルクス主義者の革命的軍伍運動がきわめてつよい説得力と浸透力を持つに至るのである。

度に圧殺され、監獄的生活をしいられており、また軍律はきびしく「上官の命令はその如何を問はず……」が原則である。

したがって一応の民主主義社会においては許されているブルジョア民主主義的諸権利の要求でさえ軍隊内では革命的状況との連関なしに決して表現されず、まさに過渡的要求としてしか提出できないものである。主なもの①隊内外での言論出版集会結社の自由にかかわる要求②命令拒否権③抗命権にかかわる要求などである。こうした要求を基本として、そのときどき具体的諸要求を提出して具体的な権利を確保し拡大していくことが必要となるであろう。

#### ⑥ 隊内に党を

最後にわれわれは、このような闘いの全体を貫徹していくためには自衛隊の外からの働きかけの強力な展開とともに、隊内に党の細胞や闘争グループを形成していくことが必要であることをはっきり確認しなければならない。たしかに、さまざまな革命的・戦闘的・自覚的な兵士の諸グループ、諸サークル、諸委員会などが創意的に形成されていくことは重要だが、軍隊という性格からして厳格な思想性と組織性・規律性をもった党細胞なしには真実の力として根づくことはできないのである。

#### ⑦ 当面のスローガン

われわれは当面次のようなスローガンをかけて闘うであろう。

☆帝国主義の反動と弾圧に抗して武装して闘う人民大衆と兵士の連帯をかちとれ

☆自衛隊のアジア侵略反対 / アジア侵略の第一歩は沖繩派兵反

さらに、軍隊そのものの問題も尖鋭になってくるのである。すなわち、国家そのものが「公共」の名の下に帝国主義ブルジョワジーの汚い利己的利益を全人民におしつけることを可能とするインテキ共同体であり、その国家意志の貫徹の物質的保障たるゲバルトとしての軍隊は実は、ブルジョワジーの利害のためにプロレタリア人民に一方的に暴力を加えるものであるということが次第にマルクス主義者、革命家の介入を媒介にしつつ明らかにされるようになるのである。

したがってついには、ブルジョワ軍隊はまさに解体すべきであり、もともとプロレタリアであり農民である一般兵士大衆を軸にして革命的解体の再編を行ない、闘うプロレタリアート人民の側に移行し、全人民の武装の一大契機へと積極的に転化すべきだということ、そうして支配階級とその国家を徹底的に粉砕し、労働者人民の国家の樹立へと向うべきだという究極的な問題に到達していくことになるのである。

#### ⑤ 兵士の過渡的要求

以上われわれは、自衛隊のアジア侵略と治安出動（内乱弾圧）という七〇年代における基本的展開の方向に即して、自衛隊の内的危機とそこをつくかたちでのわれわれの働きかけの論理についてのべてきたが、こうした政治的組織的総路線のもちこみのための闘いは、自衛隊員とくに下級兵士のいわゆる隊内民主化などの「過渡的要求」のための闘いと有機的に結合されなければならない。軍隊はもと「社会」から切断して兵士大衆を兵営に封じこめることよって成立するものであり、兵営内においてはいわゆる民主主義は極

対

☆自衛隊の治安出動（訓練）反対

☆労働者農民学生と兵士の連帯と交流をかちとろう

☆自衛隊内外の政治活動の自由をかちとれ

☆小西三曹と連帯し、たちあがれ / 小西公判闘争をかちとれ

☆反戦闘争にたちあがった米兵を支持し連帯しよう

☆小西行動委を初めさまざまな創意的活動グループをテコに自衛隊兵士大衆と人民大衆との接点を広げ生きた交流をかちとろう

# 反軍閥争勝利・小西裁判閥争勝利へ奮起せよ！

## —— 第一回 小西裁判閥争に際して ——

われわれは小西裁判閥争の開始にあたり、まずもって次の三点を再確認しつつ、反軍閥争勝利、小西裁判閥争勝利にむけて、さらに徹底的に取り組みを強め、革命的な反軍閥争の着実な発展を勝ちとっていかねばならぬ。

### 小西三曹の決起の革命的意義

才一に、われわれは、わが日本革命の達成（さらに世界革命の達成）にとって、小西三曹の決起が有している決定的に重大な意義をつかみとり、小西三曹がひらいた道を、小西三曹とともに進撃する不拔の決意を打ちかためなければならぬ。

プロレタリア革命の勝敗が、軍隊の動向によって決定的に左右されることは言をまたない。不可逆的な体制的危機のなかで、前衛党の指導のもと、人民の中心となって革命に立ち上る労働者階級は、敵権力の反革命的暴力装置の中核たる軍隊にうちかち、その軍隊の解体を兵士大衆の獲得として表現しないでは、革命の勝利を真に手中にすることはできないのである。

十・八羽田から東大安田決戦へそして四・二八沖繩閥争から、十・二二に始まる十一月決戦へと、わが同盟と白ヘル労働軍団を主力とする武装戦闘軍団が形成され、そのもとにいく万もの人民大衆のデモが武装的發展を示すなかで、それに対応した自衛隊の治安訓練の強化にたいし自衛隊内部で小西三曹がそれを公然と拒否し、人民の武装権の復権をかかげて決起したことは、まさに、プロレタリア革命における軍隊解体・兵士獲得の構造を鋭く、先どりの切りひらいたものであった。十一月決戦をもって革命にむけての内乱的死闘の時代が始まったという現在の時代的性格は、その一点に、最も鮮明に、集中的に表現されたといわなければならぬ。

日米共同声明をもって本格的なアジア侵略に乗り出した日本帝国主義は、いまそのための最も主要な階梯として、アジア侵略のための「七二年沖繩返還」を準備し、同時にそれと密接な一体的関連をもつものとして、南朝鮮と台湾への支配強化を熱病的におしすすめている。自衛隊の強化こそは、入管体制強化、民族排外主義宣伝、破防法体制構築、在日軍基地再編等とともに、侵略体制のための攻撃の中心軸をなしている。自衛隊は、泥沼に陥り、包囲され、動

揺を深めつつある米軍との部分的肩がわりの拡大をすすめ、四次防をもつて侵略的戦力の増強を準備し、沖縄派兵をもつて海外派兵の突破口となし、在日米軍基地の自衛隊移管をもつて日米共同作戦の事実上の発動を強め、治安訓練強化をもつて内乱鎮圧に備え、そのなかで自衛隊員大衆にたいする強権的思想的統制の強化に狂奔しつつある。

こうした自衛隊強化の攻撃に、徹底的な政治的大衆的反響を加えかつ自衛隊内部に兵士大衆の闘いをすすめそこにおける同盟(党)の形成をかちとっていくことは、まさに革命の武装蜂起の時点で兵士大衆の大量の獲得と自衛隊解体を決定的に準備するものであり安保粉砕・日帝打倒、日帝のアジア侵略を内乱への闘いの死活にかかわる闘いとなっているのである。また、日帝の侵略にたいするアジア人民の武装的死闘にわれわれが応えて自国の日帝を打倒していく闘いの重大な一環となっているのである。

### 革命的反軍闘争の徹底的推進へ

こうした見地にたつて、才二にわれわれの革命的反軍闘争の方針が徹底的に確立され、物質化され推進されていかなければならない。われわれの革命的反軍闘争は、兵士獲得の論理を包摂した日本革命の一環としての自衛隊解体の闘いであり、労働階級人民の自衛隊にたいする政治的全国的闘争と、兵士大衆に働きかけ兵士大衆自身の自己解放をめざしていく自衛隊内部における闘いとの有機的結合である。

まず、われわれは、アジア侵略と内乱鎮圧の軍隊としての自衛隊

行動に踏み切った。その道に続く者は、もちろん小西三曹のような決起を、小西三曹を越えてかちとっていくかなければならないが、しかしその基礎にある基本的活動形態として、非公然・非合法の組織的活動の貫徹のうえに、部分的・改良的課題での一定の限定された公然的闘争を行なうことよつて勢力の付植をはかることが重視されねばならない。それは、最も強固な思想性・組織性を必要とし、また権力から自己を防衛するための精密、柔軟、果敢な能力を必要とする困難な闘いとならざるをえないが、しかし、この十有余年の間、日本労働者階級の深部に不拔の同盟(党)をつくりあげてきたわれわれの力をさらにとぎすますならば、われわれは必ずこの闘いに勝利しうるであろう。

この闘いを押しひらいていく基本的な方向は、『アンチ・安保』で小西三曹が問いかけたように、今日の自衛隊が支配階級・資本家・自民党の私兵であり、その庸兵・ロボットとされていることへの反省的自覚を求め、自衛隊兵士が守るべきなのは支配階級・資本家のか、それとも人民のかを問うていくことにある。

そして、それを問う根拠、いかにえれば兵士がそれをみずからの問題として考えぬくべきをわれわれは兵士自身の生きる権利に求めねばならない。わずかばかりの権利や自由すら剝奪し、とくに政治的諸権利を禁圧し、またしばしば死を賭けた訓練すら強要し、さらに治安訓練の強化に動員していくような防衛庁・将校団の支配統制にたいし、兵士自身の間人としての生きる権利を主張し、そのための自由を要求し、支配階級のロボットとして死地に追いやられることを拒否しようとするところからこそ、兵士自身の自己解放にむか

の実態と本質をさらに全面的に暴露糾弾しつつ、とくに、沖縄派兵計画や四次防策定にたいしては防衛庁デモを頂点とする全国的政治闘争を設定し、またこれと結合させながら、ナイキ設置をはじめとする自衛隊基地増強や、立川その他のような米軍基地の自衛隊移管の策動にたいしては強力かつ系統的な基地闘争を組織し、それを在日米軍基地にたいする闘いとともに取り組んでいかなければならない。

そして、こうした闘いをテコとしつつ、あらゆる全人民的課題の闘いにおいて、機動隊を打ち破りその殲滅をかちとっていくことはもとより、自衛隊の出動にたいしても断固としてそれを迎え撃ち、不屈の大衆的抵抗を貫徹することその課題をすずからに課した大衆の実力闘争の戦闘的・武装的發展をかちとっていくことが、自衛隊解体・兵士獲得のための絶対的前提であることを確認しなければならぬ。軍隊は、自国民衆の不屈の抵抗の前でこそ、最も深刻な内部崩壊の危機にさらされていくのである。

その一方で、同時にわれわれは兵士大衆への働きかけを不断に強め、彼らが才二、才三の小西となり、みずからの解放を求めて進むよう徹底的に援助しなければならぬ。そして戦闘的兵士への脱皮をかちとった人びとが「脱走兵の思想」に走るのではなく、自衛隊に踏みとどまりその内部において長期的に着実に闘いぬくことを求め、その兵士をわが同盟の思想・路線・組織のもとに獲得し、まさに自衛隊を反革命の支柱から革命の策源地へと転化していくこの闘いを、革命的前衛としてのわが同盟の全責任において担いさきつていかなければならぬのである。

小西三曹は、その道をひらくために敢えて投獄を冒して公然たる

軍隊を檻に入れ社会から特別に隔絶された真空地帯にしてしまおうとする権力の支配にたいして、われわれは、軍隊もまた社会の一部であり、社会の一縮図であり、そこにも階級闘争が存在することとについて、自衛隊員の眼をひらかせていかなければならない。

その意味で、自衛隊内における民主化闘争——基本的人権、言論集会出版結社の自由、命令拒否権待遇改善、上部の不正腐敗追及等にかかわる兵士(下士官、兵)大衆の闘いは、反軍闘争の一環として重要な意味を持っている。それは、無自覚であった兵士がみずからの問題に覚醒する有力な端緒であり、また共產主義者の軍隊内活動の自由を拡大する条件であり、さらに、軍隊内における革命党建設の進長に媒介されることよつて革命への過渡的要求のなかにも位置づけうるものである。

こうした自衛隊内闘争の推進・兵士獲得のために、われわれは、拠点基地の設定とそれにたいする系統的な工作、あるいは退職自衛官の再組織化等をふくむあらゆる手段をとおして、活動を強化しなければならぬ。

### 反軍闘争の一環たる小西裁判

才三に、われわれは、小西裁判闘争を、こうした革命的反軍闘争の発展のために、そのためにのみそのテコとして、推進していくことを、明確に再確認しておかなければならない。

重要なことは、小西前三曹は被害者として不本意ながら法廷に引き据えられているのではなく、佐渡基地における決起を今日の貫徹する場所として法廷を目的意識的に、攻撃的に活用しているのだ



ということである。小西前三曹の目的は、したがって、自衛隊が違憲であることや彼が無罪であることを、それだけ切り離して自己完結的に立証しようというところにあるのではなく、法廷闘争の総体を反軍闘争推進と日本革命勝利のためのテコとしていくところにあるのである。それはまた当然にも、われわれが小西裁判闘争を自己の課題として担うところの唯一の理由でもなければならぬ。

それゆえに、われわれは、小西前三曹とともに、この裁判をとらして、アジア侵略と内乱鎮圧の軍隊としての自衛隊の実態と本質を徹底的に暴露糾弾し、それについてすでにわれわれが行使しつつあるところの人民武装権を徹頭徹尾、宣揚していかなければならぬ。

50

九・二五 第二回小西裁判に総決集せよ

## 自衛隊の革命的解体、全人民武装にむけ

### 反軍闘争を推進せよ！

九月二十五日、小西誠前三等空曹の才二回裁判闘争が新潟地裁でおこなわれる。周知の如く小西三曹は、昨十一月大衆闘争の武装的発展に呼応し、自衛隊の治安訓練を拒否し、「全自衛隊・革命的共産主義者同盟・赤軍」の結成を宣言して決起し、自衛隊法違反で起訴された。才一回裁判闘争は七月二十三日地裁、機動隊の戒厳体制について闘われた。才二回裁判闘争は、前回を越える全国総決集をもって闘い抜かれる必要がある。

法廷における小西前三曹の闘争は、新潟県佐渡航空自衛隊才四十六警戒群通信電子隊内での小西三曹の闘いの発展であり、延長である。われわれは、法廷での小西三曹の自衛隊の革命の発展、自衛隊の革命的解体、人民武装のよびかけを、自衛隊員、元自衛隊員、全人民にあまねくつたえ、自衛隊の革命的解体、反軍闘争の先頭に立って闘い、小西裁判闘争を勝利的に闘い抜かねばならない。前日の二十四から闘いは開始される。これに総決集するとともに、「才二、才三の小西を行動委員会」を至るところに結成し、その拡大強化のために闘い、小西三曹の主張を自衛隊員、全人民大衆につたえるために闘わねばならない。

才二回裁判を前に、本年三月以来の準備をかさねるなかで、元自衛隊員、予備自衛官、によって隊友反戦がついに九月十五日全国結成大会を開こうとしている。すでに八月二十四日、隊友反戦東部方面隊東京支部が結成され、全国大会にむけて準備がすすめられており、反軍闘争はあらたな段階に入ろうとしている。

## 一 侵略と内乱鎮圧へ 自衛隊の再編強化

### 七二年へ日帝のアジア侵略激化

昨十一月の「日米共同声明」を突破口にカンボジア会議、日「華」協力委、日韓閣僚委、日韓協力委と日本帝国主義のアジア侵略はますます本格的なものとなりつつある。入管法再上程と、来年一月を期限とする、日韓法的地位協定にもとづく在日朝鮮人への「永住権」申請の攻撃は、アジア侵略のための国内体制構築であり、プロレタリア国際主義への攻撃でもある。

七二年をメドとする在韓米軍の削減とベトナム的沖繩「返還」政策、沖繩への自衛隊派兵は、七二年をもってはじまる四次防構想と一体の攻撃であり、事態はますます緊迫の度を加えつつある。他方では、アジア侵略にむけての強権的な「城内平和」のための欠くことのできない革命党の抹殺をねらう破防法裁判が七二年をメドにすすめられるなかで、小西裁判をとおして敵権力は同じく七二年をメドとして自衛隊の合憲判決をねらう攻撃をかけて来つつある。アジア侵略と内乱鎮圧を遂行しうる自衛隊の帝国主義的軍隊への再編強化の攻撃、それに対する自衛隊の解体、人民武装にむけての闘争は、こうした情勢、つまり、内乱的死闘の時代においては決定的である。アジアにおける帝国主義の植民地・後進国支配体制の崩壊的動揺

は、ベトナム・インドシナ半島を焦点としてアジア、アラブ、アメリカ、中南米における民族解放闘争の永続的反乱を激発しつつ、アメリカを中心とする帝国主義軍事体制の解決不能な崩壊的動揺をひきおこしつつある。

昨十一月の「日米共同声明」はこうした帝国主義の危機に対する対応に他ならず、アジアの泥沼へ日本帝国主義がすっぽりと足を踏み入れたことを意味する。

アジア危機と軍事体制の崩壊的動揺という国際帝国主義の危機は、アメリカ帝国主義に死重となつてかかっている。このことは日本帝国主義のアジア侵略をして未曾有の兇暴さを帯びさせるものとならざるをえない。これは、アジア侵略と内乱鎮圧のための自衛隊の再編強化の性格を決定するとともに、自衛隊をめぐる階級闘争がきわめて鋭いものとなって爆発せざるをえないことを示している。

七〇年安保闘争は六七年十月八日をもってはじまり、六九年十一月から六月闘争をもって頂点として闘い抜かれた。七〇年安保をめぐる攻防とはわが同盟が六六年才三回大会以来くりかえしあきらかにしてきたようにアメリカ帝国主義のアジア支配の危機に対する日米帝国主義のまきかえしであり、このまきかえしをとおして、日帝のアジア侵略を本格化せんとするものであった。したがってベトナム人民を先頭とするアジア人民の英雄的な闘争は、直接的には、アメリカ軍の泥沼的敗退をとおして日本帝国主義の危機に拍車をかけ、それを規定するものとなったのである。

### 七〇年闘争と自衛隊の治安出動

同志山崎の死を賭して闘われた十月八日の同盟を先頭とした日本労働者人民の佐藤訪ベトナム阻止にはじまり、安保紛争・日帝打倒沖繩奪還、佐藤訪米阻止、日米共同声明粉碎の十・十一月から六月を頂点とする七〇年闘争は、アジア人民と呼応する日帝打倒にむけての闘争でもあった。アジア侵略にふみきつた日帝は、アジア人民に呼応してそれを阻止せんとする日本労働者人民の闘いに対して、機動隊による非常体制をもってこれに対すると共に自衛隊の治安出動を本格化することでこれにそなえたのである。

欧米の帝国主義国はもとより、戦前の日帝もまたいりまでもなく後進国半植民地では闘争が暴動的武装的に発展する、またその可能性をばらみ、ときには平和的合法的なわくを大衆的にはずれることが予想されただけで、軍隊の治安出動がおこなわれてきた。

自衛隊は「間接侵略」をイデオロギーとする治安警察的側面を主にし、朝鮮戦争へ出動した米軍の補助部隊として出発（警察予備隊）した。

これは戦後日本の、日帝の軍事的敗北、米占領軍の駐留につづく日米同盟を基本的な要因とし、戦後革命敗北の代償としての「平和と民主主義」をイデオロギーとする支配の戦後の特殊性に規定されたためであった。この特殊な条件は、憲法九条に象徴される問題であらわになつたように、これまで国民の軍隊として合意をもちとすることに失敗して来たため、治安出動は警察の軍隊化による機動隊の強化によってきりぬけられて来たのである。

### 自衛隊の本格的帝国主義軍隊化

だが、いまやアジア侵略に対応した自衛隊がもたられ、七〇年安保闘争の武装闘争を質にふくんだ巨大な大衆闘争の爆発的發展は本格的な帝国主義軍隊としての自衛隊の再編強化を組上にのせるに至つたのである。

したがって特別警備訓練を拒否し人民武装を訴えた小西三曹の決起は十一月決戦への合流にとどまらず、こうしたアジア侵略にむけての自衛隊の再編強化に対する闘争としても決定的に革命的といわねばならぬ。

七〇年代の自衛隊の海外派兵を射程とした七〇年から七二年にかけての自衛隊の帝国主義軍隊としての本格化は、突破口として①七二年をメドとする沖繩派兵、②入管を突破口とする排外主義攻撃、大國主義、愛國主義イデオロギーの洪水、住民基本台帳法をもって制度化されつつある侵略と治安のための国家国民総動員体制、総じて戦争と暗黒への国内支配体制③米軍基地の自衛隊移管をもつてする自衛隊の増強と米軍のより一層の戦闘力の効果的發揮をねらった布石、④間接侵略をイデオロギーとする内乱鎮圧を自衛隊の戦略的課題にすることの明確化⑤五次防・十五兆円を展望した四次防四兆円のこれまでにない予算規模をもつた（三次防・一兆円）攻撃。これまでの米軍を中心とした補助的部隊としての自衛隊の性格よりする「装備計画」から、四次防は総合的な「防衛構想」でかためられた日米同盟下の本格的帝国主義軍隊への編成計画をもち、米軍の来援が直ちに期待できないうちに「初期の段階で独力で対処する能力」をつけさせ、制空・制海権

を確保し、「洋上撃破」できることを構想している。

このように海外派兵を構想した四次防は、さらに防衛高校制度の計画、予備自衛官制度七万人への増強（現在三万六千）の計画などをあわせており、帝国主義的軍隊への転換は、軍隊を焦点とした、社会的、政治的ないデオロギッシュな再編強化をとまわずにおれない。⑥七二年をメドとする小西裁判をとおして自衛隊合憲判決をねらい、沖繩派兵、海外派兵、内乱鎮圧、四次防構想などの攻撃のための憲法体系との矛盾を調整し法規範を整合、追認していくことによって社会的に自衛隊を位置づけ国民の軍隊の合意をねらう。

## 二 自衛隊の革命的解体 全人民の武装を進めよ

アジア侵略と内乱鎮圧を遂行しうる本格的な帝国主義軍隊として自衛隊を再編強化するという攻撃に対して、労働者人民の全国的政治闘争をもって包囲・反撃を加え自衛隊内部でこれに呼応する兵士大衆の闘いを組織し、そこでの革命党建設をきりひらくことは、日本革命にむけての過渡的要求を媒介にした兵士の革命の側への移行と自衛隊の解体、人民武装と武装蜂起を今日的に準備するものである。まさに、このような闘いはアジア侵略を内乱への闘いとして決定的な一環をなしている。七〇年代において不可避的な自衛隊のアジア侵略と内乱鎮圧への公然たる登場は、プロレタリア人民大衆の階級的危機でもあるが、なによりも自衛隊自体の危機を深刻化

させ、自衛隊の内的危機と矛盾を激成する。人民武装の闘いの一環としてのプロレタリア人民の反軍闘争は、自衛隊との対決を積極的に行うにせよ、そのことであらかじめ、人民大衆に対してもそうした事態にそなえた自衛の闘いを準備させなければならぬ。そのことによって自衛隊の出動という情勢をその解体を促進するものへと転化することを可能とする。

### 自衛隊を包囲し解体へ

兵士大衆をたえず兵舎から街頭にひきだしこくり返えしの衝突と対峙、接触・交流をとおしての兵士の政治的経験は自衛隊の革命的解体を促進するのである。

プロレタリア独裁樹立をめざす闘いは、アジア侵略を内乱へ、安保粉砕・日帝打倒の総路線にそって闘われるが、この闘いは自衛隊の出動をひきだす闘いに発展するであろうし、せざるをえない。

この衝突に対し、自衛して（労働者赤衛隊）ひるまず対峙し抜き自衛隊の内的危機をついに革命的解体にまでいたらしめ、全人民武装の積極的な契機にまで転化していかねばならないのである。アジア侵略・内乱鎮圧への自衛隊の登場は、排外主義、愛国主義の熱狂的な洪水のなかでおこなわれるであろうが、武装人民の対決、人民の政治的包囲のなかで内的危機を成熟させ、ついに解体にまでいたらしめることができる。

## 第二、第三の小西へ兵士の決起を

こうした武装人民の対決、政治的包囲の闘いこそが、自衛隊を革命的に解体し、革命的兵士大衆の獲得のための条件であることを明確にした上で、われわれは排外主義と愛国主義のイデオロギーをばねのけ兵士大衆自らが才二才三の小西となつて闘うこと、兵士大衆自身の自らの解放にむかって闘うことを求め、これを積極的に支援しなければならぬ。

戦後の特殊性を刻印された自衛隊の、アジア危機を基底的要因とした帝国主義的軍隊への本格的再編への攻撃は、自衛隊員への政府、将校団の統制と締めつけの強化、予備自衛官制度の半強制的な制度化、訓練と反共教育の徹底化という有形無形の攻撃、兵士大衆の生命権の露骨な否定とあらわれており、この自衛隊の再編強化という攻撃自体が一層の矛盾の激成をうみだすのである。このことは全国各地の基地で小西三曹の決起以来、かつてない兵士の反乱が激増しつつあることのなかにあらわれている。

軍隊はけつして真空地帯ではない。支配階級が軍隊を社会から切りはなして真空地帯にしようとするにもかかわらず、軍隊も社会の一部としてその縮図として軍隊特有のかたちで階級闘争が存在することについて自衛隊員自身に自覚させねばならない。将校団の統制と兵士大衆の要求との間の対立は日常的には結節点に位置する下士官層の矛盾へしわよせされる。（小西三曹の『反戦自衛官』にかかれていようように）。軍隊内の階級闘争は、アジア侵略と内乱鎮圧を軸とする治安出動、防衛出動、海外派兵などにもっとも深刻な様相

をとるが、民主化闘争は——治安訓練拒否など命令拒否権、基本的人権、言論集会出版結社の自由、待遇改善、上官の不正腐敗の糾弾など兵士の生命と運命にかかわる闘いは平時における兵士大衆の反乱の契機として反軍闘争推進の重大なテコとなっている。

隊内外での言論集会出版結社の自由と命令拒否権を軸とするいわゆる民主化闘争は無自覚であった兵士大衆が、権力と軍隊、将校団と兵士について自覚する契機であるばかりか、共産主義者の軍隊内外での活動の条件を拡大するものであり、革命前情勢にあっては隊内外での革命党の活動と闘争を媒介し革命への過渡的要求に発展させなければならぬ。兵士大衆の人間としての生きる権利の要求に端を発する兵士自身の自己解放にむかっている闘いは、自衛隊の革命的解体、人民武装の有機的結合をとおして、プロレタリア革命の勝利的貫徹のなかで、実現されることをたえずくりかえしあきらかにしなければならぬ。

革命にむかっている過渡的要求への兵士大衆の結集は、革命党に媒介されてはじめて可能となるが、平時における民主化闘争と反軍闘争との結合もまた、共産主義的兵士の合法・非合法、公然・非公然の組織的活動の柔軟な適用をふくむ意識的指導を媒介として勝利的に保証されるであろう。

### 自衛隊の解体が全人民的

#### 武装水準を高める力ギ

内乱の死闘の時代がきりひらかれたいま、労働者人民の自衛的武装、労働者人民の自衛を指導しうる恒常的武装部隊、自衛隊の革命

的解体は兵士大衆の獲得のそれぞれを環とする全人民武装にむかっ  
ての闘いは焦眉の課題となっているが、ブルジョア軍隊の武力水準  
をプロレタリア人民に保証するのは、自衛隊の革命の側への移行に  
あることはいうまでもない。十月八日から十一月二日六月闘争の  
三年間の過程で、一方でプロレタリア人民の大衆闘争の端緒的な武  
裝的發展がきりひらかれ、他方で自衛隊の治安出動態勢が構築され  
それによりする小西三曹の治安訓練拒否、「全自衛隊革命共同赤軍」  
結成宣言、十一月闘争への合流という革命的決起がはつきりと示さ  
れている。なによりもスターリン主義者によって歪曲されてきた戦  
後の自衛隊をめぐる階級闘争と、人民武装をめぐる闘いが、革命的  
左翼の十一月を頂点とする闘いと小西三曹の革命的決起によっ  
てまったく新しい次元に入ったのである。とくに小西三曹の決起は、  
自衛隊の革命的解体を人民武装の一環に位置づける闘いを身をもっ  
て示し、護憲論よりする自衛隊違憲論つまり自衛隊の解散、または  
除隊という平和と民主主義よりするブチ・ブルジョアのイデオロギ  
ーを断固として排し、軍隊の革命の側への移行、自衛隊の武力水準  
をいかに労働者人民の階級の利害に役立てるかという革命的視点を  
全人民の前に示したのである。

こうした闘いは、いうまでもなく、決して平和主義者や人道主義  
者によって闘い抜かれるものではなく、小西三曹の共産主義者、革  
命主義者としての自己形成への闘いを媒介にはじめて達成され  
た闘いであることをとくにあきらかにしておく必要がある。

侵略と内乱に対しての帝国主義軍隊への自衛隊の本格的再編が開  
始された現在、もはや、従来の平和と民主主義よりする社民的な、

スターリン主義的を闘いではなんらの大衆闘争も不可能であり、日  
帝への屈服しか意味しないものとなっており、日本帝国主義打倒、  
共産主義革命の立場からのみ有効な闘いをかちとることができ  
る。支配階級は、自衛隊の帝国主義的軍隊への本格的転換をねらっ  
てこれまでの「平和と民主主義」をつき崩しつづつあるが、労働者人民  
をアジア侵略のための排外主義と愛国主義に動員することはまだ成  
功していない。支配階級はこれまでの「平和と民主主義」をかな  
ぐりすてて質的転換の攻撃を加えつつあるにもかかわらず、「平和  
と民主主義」ではこれに反撃すら加えることができないであり、社  
共の日帝への屈服に示されるように陣地をつぎつぎと埋められよう  
としている。

支配階級と政府、将校団よりする攻撃のなかで、労働者人民、隊  
員の平和と民主主義の意識の分解、動揺は不可避であるが、革命的  
共産主義者はこうした労働者人民、自衛隊員の平和と民主主義の危  
機意識に革命的立場から介入し革命の側に動員し、変革していかな  
ばならない。

自衛隊の帝国主義的軍隊への本格的再編は、社会的政治的再編と  
同時にすすめられるのでなければ不可能であるが、この転換の過程  
は、支配階級にとっても一つの矛盾と危機をなすには達成しえない。  
したがって自衛隊をめぐる階級闘争はこれまでのように陰然として  
ではなく公然たる政治的焦点になるし、していかなばならない。

小西三曹につづく才二、才三の小西をかちとるにあたっての困難  
は、自衛隊員の平和主義、民主主義、経済主義、人道主義的意識  
をもった反乱と除隊という自然発生的意識から、自衛隊の革命的解  
体は全人民武装という革命的兵士への形成をかちとるための契機を

いかにつくりだすかにある。

それはいうまでもなく軍隊内での革命党の細胞の建設と、隊外か  
らの工作、基地への大衆的政治闘争にかかっているのであるが、そ  
れは自衛隊の役割り、再編強化の攻撃の目的と方向性、出動目的と  
方向性を具体的に暴露していく闘いが、隊員の危機意識と問題意識  
にからみあっていく必要がある。

### 三 小西裁判闘争を 反軍闘争のテコに

小西裁判で人民武装を宣言せよ

その点で小西裁判闘争の全過程と法廷での小西三曹の主張は全自  
衛隊員の注目的となっている。

裁判闘争を反軍闘争のテコとなし、人民武装の立場よりする自衛  
隊の革命的解体に徹底的に利用されつくさなければならぬ。した  
がってこれまでの自衛隊裁判のように違憲判決を追及し、もって、  
おわりとするのではこの裁判闘争の意味は十一月の決戦の以前にひ  
きもどされる反動的なものとなるといわねばならない。

これまでの自衛隊裁判は、司法の帝国主義的再編の攻撃のなかで  
「統治行為」に属するという事で違憲判決を追放しており、これ  
は下級審判決であっても違憲だとする判決がでることは政府自衛隊  
に打撃であるからに他ならないが同時にこうして、執行権力のボナ  
パ的強化がすすめられているのである。小西裁判にあっては検事、

裁判官とも東京高検、地裁から派けんされてくるということに示さ  
れるように、はつきりと敵階級は対決の姿勢をかまえ、七二年をメ  
ドとする沖繩派兵、四次防にむけて合憲判決さえねらっているの  
である。こうした裁国主義の兇暴な攻撃に対してはこれまでの護憲  
平和憲法を守れ)よりする違憲論争では闘いえないことはあきらか  
である。戦後一貫して人民武装からの反自衛隊闘争がなかったこと  
と関連して違憲判決をそれだけを自己完結的目的にする平和主義  
立場では裁判闘争自身闘いえないことはいうまでもない。

自衛隊が、現行の憲法秩序に違反した存在であることは自明であ  
るが、この憲法秩序からの支配階級の側からする違反は統治行為の  
判決からの追放は合憲といいくるめる裁判の調整と追認の過程は、  
支配階級よりする一方的な支配階級と人民との「契約」の破棄、つ  
まり支配階級から公然と内乱に訴えて来ていることのあらわれであ  
る。したがって革命的共産主義者よりする自衛隊違憲の追及は、支  
配階級がなぜ彼らの憲法秩序をやぶってまで自衛隊をもたねばなら  
ないか、自衛隊の目的と性格、出動目的などの反人民性を暴露し、  
支配階級がこのような公然たる内乱に訴えて来ている以上、労働者  
と人民は、なんら憲法秩序にとらわれる必要のないこと、こうした  
攻撃に対しては、自衛権、革命権を行使する権利のあることを明確  
にし、人民武装を高らかに宣伝するものでなければならぬ。自衛  
隊員はしたがってまた自衛隊法を順守する必要がなく、憲法および  
法律にしばられる必要がないこと、命令拒否権、抵抗権、革命権を行  
使して支配階級の攻撃にはこたえねばならないことをあきらかにす  
る必要がある。

### 特別警備訓練の実態を暴露せよ

また特別警備訓練の問題を徹底的に追及し労働者人民の自衛、全人民武装の立場から、労働者人民を敵とする内乱鎮圧の実態を暴露していかなければならない。

小西裁判は人民武装よりする自衛隊の革命的解体を宣揚する場として、またその立場から労働者人民、自衛隊員のおお平和主義的危機意識をも動員しなければならぬ。そして裁判闘争をおして支配階級のアジア侵略と内乱鎮圧の意図を暴露し、労働者人民の「平和と民主主義」の危機を防衛するための自衛の闘いに立ちあがることを訴え、そのために隊にとどまって革命的兵士として闘い、全人民武装にむけて闘う立場への転換をひきだす必要がある。(社会民主主義的労働者との自衛のための統一戦線は、こういう表現をとってすめられるのである) 護憲=違憲論から自衛隊の廃止のために自衛隊を去る自衛官にはそのような行為では自衛隊をなくすことができないことつまり違憲合憲いずれにせよ裁判は、現実にはたかわれる階級闘争の幻想的形態での闘争に他ならず、現実に国家の実体的支柱として重火器装備の武装部隊が存在していること、これは人民の武装と自衛隊の革命的解体、革命によってはじめて可能となることをたえずあきらかにしていかなければならない。

### 裁判闘争での違憲問題の位置づけ

裁判闘争を闘うにあたって直接に大衆闘争と大衆運動を対置し代

行させることだけではけっして有効な闘争にならず、「小西裁判の実力粉砕」という立場にゆきつくだけである。小西裁判は、現役の自衛隊員の活動と闘争、隊友反戦、才二・才三の小西を行動委員会など反軍闘争と現実の階級闘争の勝利的貫徹人民武装と自衛隊の革命的解体の闘いに決してかわることはできないがこれらの闘いの重大なテコに他ならない。もともと裁判所自体は、帝国主義支配を前提にした支配階級の利益の貫徹のための場に他ならない。共産主義者はこのような不利な場をも、真実をあきらかにし、それでもって宣伝・煽動の場に転化していくために闘うのである。

才四インターの諸君は、「小西裁判実力粉砕」のブチブルの急進主義を批判し、「違憲裁判反対」でもって平和主義を批判するが、この正しい結論は、それだけでは裁判闘争の方針にはならない。「裁判実力粉砕」の立場を批判するのならば、裁判闘争において法律ならびにその運用とその暴露を無視抹殺してはならない。

ブルジョアジーが自分の法規範であるブルジョワ法を違反してまでおこなっている執行権の帝国主義的再編のもつ重大な意味を暴露し、もはや労働者人民は支配階級が憲法に違反した以上、憲法体系にとらわれることなく、この攻撃をむかえうたねばならないことを暴露し、労働者人民の平和と民主主義の幻想をうち破り、労働者人民の武装自衛、人民武装、自衛隊の革命的解体にむかっての闘いを訴えねばならない。

以上の論点をふくめて、われわれは小西三曹とともに裁判闘争を闘い抜き、法廷での小西三曹の主張、法廷での自衛隊の暴露をわれわれは全自衛隊員、全労働者人民に伝えるために闘いぬかなければならない。

## 四、九・二四、二五新潟へ全国から総結集し反軍闘争を推進せよ

### 全国に「第二、第三の小西を行委」を

九・二五裁判闘争への全国からの結集、全国いたるところでの小西行動委の結成と強化、隊友反戦全国結成大会を成功させ、それにひきつづく隊友反戦の強化。拡大「整列ヤスメ」の活用などをとおして反軍闘争を推進し、軍隊内に革命党(細胞)を形成するために関おう。

才二・才三の小西を行動委員会を全国いたるところに結成せよ!  
九・一五隊友反戦全国結成大会を成功させよ!全国に隊友反戦を!  
自衛隊を革命的に解体し、全人民の武装のための闘いを発展させよ!

アジア侵略と内乱鎮圧のための自衛隊増強反対! 侵略と抑圧のための自衛隊沖繩派兵反対! 米軍基地の自衛隊移管反対! 才三  
次砂川闘争を先頭に全国基地闘争を爆発させよ!  
自衛隊内外の政治活動の自由をかちとれ!

労働者農民学生と兵士の連帯と交流をかちとれ! 小西三曹と連帯したちあがれ!  
小西裁判闘争勝利! 才二回公判に総結集せよ!  
反戦闘争にたちあがった米兵を支持し連帯しよう!

## 第四インター日本支部の「叛軍闘争論」批判

(一)

九月二五日、新潟地裁での小西誠三等空曹の第二回裁判闘争を前にした九月十五日、隊友反戦全国結成大会が、狼狽し慌てふためく自衛隊幹部・私服をしりぬにして、旧大本營、旧近衛師団、自衛隊市ヶ谷駐屯地の防衛庁共済組合市ヶ谷会館で約七十人を結集して会館をゆるがすインターの大合唱のうちにかちとられた。

これは昨年十一月の小西三曹の決起に次ぐ反軍闘争のあらたな段階といえよう。これは小西三曹を中心に三月以来準備がすすめられてきたものであるが、八月二四日には隊友反戦東部方面隊東京支部が結成され、ついで中部方面隊の京都・大阪でそれぞれ隊友反戦が結成されるなど、全国の元自衛官・予備自衛官の隊友によってかちとられたものである。九月六日には、関東反軍行動委員会連絡会議がひらかれ、さらに二一日大阪、二二日東京で反軍集會が成功裡に開かれようとしている。こうして第二回裁判闘争は七月の第一回裁判闘争の時点よりはるかにすすんだ地点で闘われようとしている。

反軍闘争の一層の推進のためには、いま一層の活動・闘争が要請されると共に反軍闘争の方針をめぐって理論上の党派闘争も大いに必要とされる。この文章は、今日いくつかの党派のうち比較的まとまった論文を出している第四インター日本支部の反軍闘争の方針について批判するものである。彼らの『討論プレテン軍事問題特集号』を

「小西行動委員会に関するわれわれの方針」(木原一雄)を紹介して批判したい。これはとくに『世界革命』紙上でも「極東解放革命の綱領的展望のもとに首尾一貫して提起している」とわざわざ推奨されているものである。

(二)

第四インターの反軍闘争のテーゼは、「第一に極東解放革命であり、第二には兵士自身の自衛隊内における反乱を形成するための政治的諸権利の支持・擁護・防衛の闘争」の二点よりなっているが、まずこの第一点から見よう。

第四インターの諸君は、周知の如く「極東解放革命」なる綱領をかかげているのであるが、それは一言でいって自衛隊が海外派兵にふみきり武装したアジア人民との激突をおしてはじめて、自衛隊の革命的解体が可能となるという、いわば侵略待望論ともいべき無責任な政策が、革命的だと信じられているものである。それは当然にも「アメリカ帝国主義軍隊の政治的分化の契機とその過程は、決して一国的枠内で進行するものではなかった。否、ベトナム人民と帝国主義軍隊との熾烈な戦争を通じてこそ推しすすめられた」などという現象論的なベトナム侵略戦争への評価に代表されている。

日米プロレタリアートが侵略戦争に対して内乱で反撃するそうした闘いになんる支援されることもなく、ベトナム人民は独力で英雄的犠牲に耐え長期にわたる果敢な闘い

が、米軍の軍事的敗北とそれを契機とした米国内での反戦闘争の一定の高揚を起し、そうした米国内での闘いをテコに米軍の解体もすすみ始めた。だが依然として米プロレタリアートはベトナム侵略戦争に對して主導的に内乱でこたえることはできていない、そうした現実を客観主義的にそのまま一般化してすますることはまちがいである。ベトナム人民の血のうめきを感じることでできない冷血漢の言辭といわねばならない。米帝は軍事的に敗退しつつもインドシナ半島全域への侵略戦争の拡大をもってすますその危機を深めつつあるが、インドシナ人民の解放もまた短期かつ安易にかちとれるとすることもまた誤りである。

なぜなら今日のベトナムにはアメリカ帝国主義の重圧がかかっているとともに、スターリン主義的指導部による国際階級闘争の一国主義的分断によって民族解放闘争が世界プロレタリア革命と有機的に結合することができないからである。いうまでもなく帝国主義の打倒は、宗主国プロレタリア人民と被抑圧民族との共同の事業としてのみ可能である。そのことはわれわれ帝国主義国プロレタリア人民の責任をますます重くするものではあるが決して軽くするものではないのである。

彼らは先に引用した米軍と「全く同様なことが日本自衛隊の政治的分化にも妥当する」と述べている。つまり、アジア人民と日本帝国主義軍隊との激突、熾烈な戦争によってのみ日本軍は解体するものである。日本人民労働者の主体的な責任を回避しアジア人民の血でそまったふんどしですもうをとろうというものである。日帝との対決回避を極東革命の名で美化しようとするものといわねばならない。

とは、日帝のアジア侵略に對して内乱でもってこたえなければならぬという日本労働者人民の革命的敗北主義を真実の国際主義として認めることを拒否し、帝国主義国家権力との対決・打倒を自らは回避し、その任務をアジア人民におしつけることを極東革命などという都合のよい言葉でごまかそうとするものである。だがアジア革命と日本革命の合流は、日本労働者人民の血であがなわれなければならぬのである。

もちろんアジア侵略にのりだした日本帝国主義軍隊に對するアジア人民の武装抵抗闘争は不可避である。これに呼応して本土、銃後の日本人民が侵略に對して内乱に訴えたとき、自衛隊の革命的解体のための闘争は決定的となる。一体「一國主義的、平和主義」にアジア侵略を一時的にしろ阻止しようと夢想すること自体まちがっている。愛國主義の熱狂にうち勝ち、排外主義の洪水と闘い、自衛隊の帝国主義的軍隊への本格化の攻撃と闘い、侵略を内乱に転化し、兵士を兵舎から街頭にひきだし、武装自衛して対峙し、ついに兵士大衆をして人民を選ぶのか支配階級を選ぶかのジレンマにたたせる熾烈な闘いは、日本の労働者人民がアジア人民と呼応して侵略戦争阻止の闘いにたちあがることなくして、また革命党の隊内外での闘いなしには不可能なのである。

#### (四)

こうした綱領的立場は、六七年十月八日に始まり六九年十月十一日から七〇年六月を頂点とする闘いとそれに呼応しそれに合流した小西三郎の革命的決起の意義を全く見失わしめてしまうことになる。彼らは、反軍行動委の闘争の重点を挙げていう。「第一は、激化し

#### (三)

次の発言も一見国際主義的にみえて全くその逆である。

「自衛隊の分化の展望について第一には沖繩人民をはじめとする極東・アジア人民との激突を通して、第二には本土労働者大衆自身との激突を通して、という二つのケースを考えようとするが、この二つは全く平行的に出現しうるものではない。第二の場合にはその質が、すなわち自衛隊内に本質的な分化をもたらしうる闘争の質なのかどうかが決定的に問われるのは改めて強調するまでもない。したがって例えば本土労働者が間にあって、日本自衛隊の極東への派兵、具体的には沖繩を突破口とする極東反革命体制への軍事的参加に對して事前に阻止し、あるいは自衛隊内へ重大な政治的動揺を与えたとしても、それが一國的、平和主義的水準で展開された性格であるとするならば、それらは真夏の夜の夢に終るであろう。」

「一時的に敵の海外派兵、その侵略政策を阻止したにせよ、それらは深く極東解放革命の綱領の下に、アジア革命との連帯によって貫徹されえない限り、本質的勝利を準備することはできない。」

これはまたなんという抽象論であろうか。侵略とアジア人民の闘い、内乱鎮圧と日本人民の闘い、この二つが全く平行的に出現しうるものではない。」などという内容を没主体的に強調するのであるが、これはとんでもないことである。だが同じく没主体的にアジア侵略と自衛隊の海外派兵に對して日本の労働者人民が「一國主義的平和主義的水準」のままですます自然発生的に「一時的」にせよ「その侵略政策を阻止」しうるまでにたちあがるであろうかと待望することもできないのである。ところでここで彼らがいいたいこ

つつある治安出動訓練に對する拒否と粉砕の闘争、その第二は、来るべき最大の環となる自衛隊の派兵拒否・粉砕の闘争である。」

「第一はいりまでもなく、六八年〜六九年の本土急進的大衆闘争の高揚が必然的に自衛隊の本質的姿を明らかにさせたものであり、われわれはこの契機を最大限に把えて、少なからず存在する全国的な若き兵士の湧きあがる疑問・動揺に明確な政治的組織的表現を与えねばならない。」

「だが、第一にとどまることは許されない。日本自衛隊の本質的な敵は、革命的日本プロレタリアートだけではなく、革命のアジア人民をも対象とするからである。」これは六七〜六九年をならん主体的に担って闘いぬくことのできなかつた評論家の言説である。

一体、第一の闘いは安保・沖繩の闘いであり、沖繩への派兵を含むベテンの返還策動粉砕の闘争ではなかったのか。それはまた権力の内乱鎮圧の攻撃をひきだし、それとの闘争でもあったのだ。したがって侵略を内乱に転化する闘いは第一と第二の課題をきりはなすことはできない。

六七年以降の闘いを「急進的」「一國主義的」「抽象的」などと規定されていたかわかっていたのだろうか。安保・沖繩をめぐる攻防は、アメリカ帝国主義のアジア支配の危機に對する日米帝国主義のまき返しもそれとあして日帝のアジア侵略を本格化せんとする攻撃をめぐるものであった。アジア侵略にふみきつた日帝は、アジア人民と呼応してそれを阻止せんとする日本労働者人民の大衆闘争の武装発展に對して機動隊の非常体制でもってこれに對するとともに、自衛隊の治安出動を本格化することでこれにこたえたのである。

したがって特別警備訓練を拒否し、人民武装を訴えた小西三曹の決起は十一月決戦への合流にとどまらず、同時にまたアジア侵略にむけての自衛隊の再編強化に対する革命的祖国敗北主義に祖国は亡ぶべきだという国際主義的の闘いでもあったのだ。

六七〇年できりひらかれた大衆闘争の端緒的な武装、小西三曹の決起に示された革命の側への兵士の獲得という七〇年代の人民武装の革命的展望は、本質的には六七〇年闘争の国際主義的な性格によってはじめてかちとられたのだ。

アジア侵略を内乱へというわれわれの立場は、レーニンの革命的祖国敗北主義の今日的適用であるが、この立場なしに反軍闘争の推進自衛隊の革命的解体の闘いは絶対に胜利的に闘いぬくことはできないのである。

### (五)

こうした極東革命論の誤りは、帝国主義打倒、世界革命が、今日的には同時的にスターリン主義打倒でなければならぬことの無自覚とも結合している。今日のアジア人民が国際帝国主義をゆるがす永続的混乱の様相を帯びており、あきらかに反帝闘争として発展させなければならぬにもかかわらず、スターリン主義によって一国的に分断され、そのことによってそうした発展性を封じられ、英雄的だが苦しい闘争を強いられている。

ロシア革命は世界革命の時代をきりひらき、世界帝国主義の世界社会主義への過渡期をきりひらいたが、スターリン主義によるその歪曲は、本来なら世界帝国主義打倒、世界プロレタリア革命の一環のなかに有機的に位置づけられることによって胜利的展望をもちえ

た被抑圧民族が、巨大な帝国主義との解放闘争に挙手でもって闘わねばならないことになっているのである。しかもそうした英雄的な闘争でさえ、国際帝国主義の危機と、スターリン主義の総体としての分解と後退によってはじめて可能となっている。したがって帝国主義の労働者人民の侵略を内乱に転化する闘いのもつ責任の重大さをわれわれは決して忘れてはならない。

第一次大戦として爆発した帝国主義の矛盾はロシア革命と二〇年代、三〇年代の激動をもたらしたが、ロシア革命の歪曲と革命の敗北によって第二次大戦は不可避となった。だがこの暴力的再編も帝国主義の矛盾を解決するものとならず、今日戦後世界体制は崩壊の危機をむかえている。戦後帝国主義の矛盾は、アジア支配の危機となつて端的にあらわれているが、この過程は帝国主義戦争の部分的な継続としての侵略戦争の激化であり、その敗退は特殊部分的な戦後革命的な様相をもたらしている。

したがって「アジア侵略を内乱へ」こそが、ロシアのポチヨムキン号の反乱、ロシア革命の兵士大衆、ドイツのキール軍港の水兵の反乱、フランスの水兵であったマルティラの反乱といったその後スターリン主義によって拒否された伝統を今日的に復活・発展させる総路線なのである。

さらに彼らは、四五年〜四九年の朝鮮人民と中国人民の解放闘争に対して日本プロレタリアートはその「絶対平和主義の観念」によって「それらと自己を絶対的に区別しつづけてきた」とし、それに対して日本共産党の五一年綱領の「民族主義的武装闘争路線は、それ故にまた日本プロレタリアートには受容できるはずがなく」と日本労働者人民の平和主義を断罪している。これは全くの漫画であっ

て、まったくその逆である。四五〜四九年の日本の労働者人民はむしろ朝鮮、中国の人民と並んで澎湃と大衆の實力闘争を闘っており、それを自衛的に武装させ、プロレタリア革命にむかって動員させるのではなく、逆に平和主義、民族主義、民主主義のなかに埋没させ武装解除したものがそ日共であった。こうした思想から人民武装など出てくる筈がない。

戦後日本の「平和と民主主義」は、国際共産主義運動のスターリン主義的な歪曲を主体的根拠にした世界革命の平和共存の変容を世界的背景にして、特殊日本的には、日帝の軍事的敗北、米占領軍とそれにつづく日米同盟を基本的な要因とし、戦後革命敗北の代償としての「平和と民主主義」をイデオロギイとする支配の戦後の特殊性に規定されたのであった。こうした戦後の支配を可能にしたのは、まさに日共を媒介とするスターリン主義であった。スターリン主義は日本労働者人民のなかに「平和主義」と「民族主義」「民主主義」をまん延させたのである。

したがって労働者人民の「平和と民主主義」を単に反革命として糾弾するだけでなくスターリン主義の問題として総括する必要がある。彼らはいかに戦後の日本とアジアの解放闘争を指導してきたスターリン主義的指導部の犯罪性、とくに毛沢東主義のそれを極東革命論を言葉でもって免罪するものとなっている。

### (六)

つぎに兵士自身の隊内における政治的権利の支持・擁護・防衛の闘争についてであるが、この点についていえば、彼らはトロツキーを下敷にして反軍の活動形態、過渡的要求の問題にしたかぎりて積

極的ではあるが、しかしやはり客観主義的であって兵士の民主化闘争が闘われていけば、革命的兵士委員会へ、革命的兵士が出てくるといった、いわば二段階階級論となっている。だが民主化闘争自身が共産主義的兵士と党細胞の闘争を媒介してはじめて胜利的に闘い抜くことができる。また民主化闘争は前革命的、革命的情勢にあっては過渡的要求として革命と革命的兵士委員会にむけての闘いに発展するのであるが、その場合にあっては党細胞のための闘いを抜きに提起することは自然発生への拝跪といわねばならない。すでに別稿で論じたように隊内外での言論集会出版結社の自由と命令拒否権を軸とするいわゆる民主化闘争は無自覚であった兵士大衆が、権力と軍隊、将校団と兵士について自覚する契機であるばかりか、共産主義者の軍隊内外での活動の条件を拡大するものであり、革命的情勢にあっては隊内外での革命党の活動と闘争を媒介して革命への過渡的要求に発展されなければならない。

平時における民主化闘争と反軍闘争との結合もまた、共産主義的兵士の組織的活動の柔軟な適用をふくむ意識的指導を媒介として胜利的に保証されるのである。

アジア侵略と内乱鎮圧を遂行しうる本格的な帝国主義軍隊への自衛隊の再編強化の攻撃は、今日、隊員への政府、将校団の統制と抑圧の強化、予備自衛官制度の半強制的な制度化、訓練と反共教育の徹底化という有形無形の攻撃、兵士大衆の生命権の露骨な否定としてあらわれている。このことは小西三曹の決起以来全国各地の基地での、浜松、市ヶ谷をはじめかかってない兵士の反乱が激増しつつあること、のなかにあらわれている。自衛隊の帝国主義軍隊化への再編強化の攻撃に対して、労働者人民の全国的な政治闘争でもって包圍、



反撃を加え、隊内部での民主化闘争と結合させた兵士大衆の闘いを組織し、隊内での党細胞の建設をかちとることは、日本革命への過渡的要求を媒介にした兵士の革命への移行と自衛隊の解体、人民武装と武装蜂起を今日的に準備するものであり、アジア侵略を内乱への闘いにとって決定的な一環をなしているのである。

(七)

したがって『統一』のように「隊内における革共同細胞の建設に解消してしまいう中核派の方針」に反対して反軍闘争は「全ての革命的大衆の闘争」であるを対置させたり、『世界革命』のように五七年から六九年までの統一戦線は党派間統一戦線であるから「このより旧来の構造が決定的に転換されなければならない」とし、それに対して「急進主義的活動家を中心とする諸々の自主的大衆闘争拠点形成そのものを主体にしての急進主義大衆運動の統一戦線」を対置したりすることでは、帝国主義国家権力と対決しぬいて自衛隊を革命的に解体し、全人民武装をかちとっていくことはできない。

しかもこれらの諸君がこのような表現をとって党派としての責任を回避し「大衆」の影にかくれて指導したり、無党派ぶって登場するにおいてをやである。しかも党派としての責任をとる形でなくそのような無党派の形をとって統一戦線をひきまわし私物化しようとするならそれはまったくのスターリン主義的統一戦線でなくてはならない。しかもその本質は自然発生への拜跪そのものなのである。

◇ 編集後記 ◇

十一月決戦の武装的貫徹に呼応して「全自衛隊・革命的共産主義者同盟赤軍」の名をもって決起した小西三智の登場は、日本階級闘争の内乱の死闘の時代への突入を明確に告げしらせた。

アジア侵略と侵略戦体制構築めぐる攻防戦たる七〇―七二年過程において、沖繩派兵を突破口とするアジア侵略と内乱鎮圧のための自衛隊増強と対決し、自衛隊の革命的解体即全人民武装の闘いを推進すること、入管・沖繩と並ぶ重要な闘争軸である。

内乱の死闘の七〇年代階級闘争を考える場合、自衛隊の問題・人民の武装の問題をぬきにするわけにはいかない。われわれは、全国各地・各大学に「第二・第三の小西を行動委」を形成し、反軍闘争を断乎として推進していくであろう。

九月十五日の隊友反戦全国結成大会に引き続き、二四・二五日には新潟小西反軍裁判闘争が展開される。第一回裁判に引き続き、全力で新潟に総結集し、裁判闘争を断乎として闘わねばならない。

本パンフレットは、反軍闘争を推進するための基本的な視点を与える論文を集めたものである。読書諸君がここに援起されている内容を十分主体化して反軍闘争に決起するよう期待する。これを第一歩として、更に充実したパンフ等を出すことも考えている。

反軍闘争の推進のために

- ☒ 発行日 一九七〇年九月二二日
- ☒ 編集 前進社出版部
- ☒ 発行 前進社／東京都豊島区東池袋二一六二―九  
電話（九八四）八六五二（代）
- ☒ 定価 一〇〇円（送料三五円）

定価 100円(千35円)